

本の紹介

ブライアン・グリーン著・青木薰訳「時間の終わりまで　物質、生命、心と進化する宇宙」講談社、686p.

2023年5月20日発行

1,800円（税別）、ISBN978-4-06-532007-5

この書籍は2021年に講談社から単行本として発売され、現在は同社ブルーバックス・レーベルに加えられている。新書ながら楽々と、安定感を保ちつつ「立てる」ことができる。700ページに迫るので、いわゆる鈍器本といってよいだろう。ともかく厚い。

著者のブライアン・グリーンは物理学者であるが、本書には本文中 $E=mc^2$ が五回登場する以外に数式は出てこない（原注ではいくつか登場する）。数式だけでなく、化学反応式もなく、図も表もない。縦書きの純粋な文字だけからなる本だ。

評者が考えるに、本書の厚さは二つのことに起因している。まず副題から想像できると思うが、自然科学と人文科学を網羅した極めて広い範囲を扱い、宇宙の歴史・未来、そして人間についてを一作品として表現していること。もう一つは「はじめに」のなかでなされた宣言と関係している。すなわち、「必要なことはすべてアナロジーとメタファーを使って説明するし、専門用語は使わない」ためだ。同じ志向の物理学徒を読者と想定すれば、一行の数式で事足りることを、アナロジーとメタファーを駆使しつつ表現しているので、自然、文章は長くなり本も厚くなる。

評者自身、意を決して本書を購入しつつもその後の二年以上、積読状態となってしまったのは、この厚さに尻込みしていたことに加え、恩師の一人の言葉に恐れをなしたからだ。

恩師が苦労しつつ取り組んでいた論考をやっと書き上げた頃のメールのやり取りで、「もし脱稿前にこの書物を読んでいたら、私は、おそらくこの原稿を書く勇気を失っただろう」と吐露された。

そんな危険な本なのか。であれば、すべてのプロジェクトをやり遂げることはできないまでも、少なくとも当面の〆切り仕事を片付け、若干メモリに余裕がある

状態で本書に取り組まねばと思ったのであった。

さて、あまりに広汎な内容につき、本書の概要を紹介することから逃げたい気持ちが強いのだが、それではいけないだろう。本書を読んでもっとも感動し、おおげさにいえば、以前とは世界観が刷新されてしまったことを一つ紹介して、この評を閉じたい。

地球の歴史46億年、もしくは宇宙の歴史138億年という時間の流れは、世間的にも、また地学の分野においても長大、と認識されていると思う。しかし、今後も続く宇宙の歴史全体を視野にいれるとごくごく短時間であり、かつ現在はまだ宇宙史のはじまりのはじまりに等しいということだ。

私自身は、せいぜい太陽が赤色巨星になる約50億年後ぐらいで、それより先の宇宙の未来像に想いを馳せたことがなかったこともあり、非常に新鮮であった。

見落としがなければ、本書に登場するもっとも遠い未来は $10^{(10^{68})}$ 年後である。これはまぎれもなく、私がこれまで目にした数字の最大記録だ。また、そこまでいかないにしても、 10^{34} 年、 10^{86} 年、 10^{359} 年先の宇宙像が議論の俎上に挙げられる。

そのような時間のスケールで考えると「惑星と恒星、太陽系、銀河、そしてブラックホールまでもが、偽い存在」という結論に至らざるを得ない。そしてそんななか、人間の存在・思考・行為にはいったいどんな意味があるのか、というのが本書の重要なテーマとなっている。

評者の理解度・筆力ではその肝となる部分を表現することは難しいのであるが、試みると「耐えられない存在の軽さ」ゆえの貴重さを自覚すること、となる。

この総括的射ているかどうか、ぜひご確認頂ければと思う。皆さんの中に若干の余裕があるとき、挑戦願いたい。

（茨城大学 伊藤 孝）

2025.11.17 受付

2025.11.18 学会ニュースレーター公開

2025.11.18 学会ホームページ公開